研究論文

国内美術館・博物館における
触覚を活用した美術作品鑑賞に関する調査

古屋祥子[*1]

キーワード：触覚教育、美術作品鑑賞、彫刻

はじめに

「美術館見学」「博物館見学」という言葉があるように、これまで、美術館・博物館における美術作品の鑑賞は、視覚芸術としての展示形態が一般的であった。しかし昨今、視覚以外の要素を意識した取り組みが見られるようになっており、本研究においては「触覚」に着目して、国内外の先進的な事例の調査や教材の開発等を行ってきた。

国連の「障害者権利条約」の批准が契機となり、日本では2011年の「障害者基本法」の改定や2016年の「障害者差別解消法」の運用が開始され、これらを背景に、全国の美術館・博物館におけるアクセシビリティ向上についても意識が高まっている。筆者は国内美術館・博物館の触覚鑑賞教育普及の事例調査を2018年から始めたが、この時点で美術作品の触察鑑賞やさわることのできる資料展示などの取り組みは増加傾向であり、全国に広がっている状況であった。しかし、2020年の新型コロナウイルス感染症の蔓延を受けて「さわる」をキーワードにしたこれらの取り組みは特に大きな影響を受けたと言え、関係者はその対応に迫られてきた。このような近年の状況も踏まえながら、触覚をキーワードに展開している美術館・博物館における取り組みについて、国内の実践事例を収集し、実施の実態を紹介する。

1．研究方法

（1）日本における触覚を活用した美術作品鑑賞の実践事例調査

・調査対象：主に以下の11箇所の施設

① 国立民族学博物館
② 京都国立近代美術館
③ 兵庫県立美術館
④ 長野県立美術館
⑤ ヴァンジ彫刻庭園美術館
⑥ 山梨県立美術館
⑦ 南山大学人類学博物館
⑧ 神奈川県立近代美術館鎌倉分館
⑨ アンテロス美術館東京分館

（所　属）
＊1 山梨県立大学　人間福祉学部

⑩ 六甲山の上美術館さわるみゅーじあむ
⑪ 日本点字図書館付属池田輝子記念「ふれる博物館」

・期　　間：2018年４月～ 2022年９月
・調査方法：訪問調査、文献調査、インターネットによる公開情報調査。

２．調査結果

① 国立民族学博物館　（大阪府吹田市）

本館２階の「探求ひろば」の一角には「世界をさわる―感じて広がる」と題された、触れて確かめること（触察）のできる展示資料コーナーが常設されている。このコーナーの監修者であり、館の准教授である広瀬浩二郎氏は、ガラスケースに入った資料を眺めるという展示が一般的である博物館の鑑賞形態に問題意識を持ち、全盲の当事者という立場から、具体的で革新的な対応策を提案し続けている。

図１　本館２階「探求ひろば」

図２　点字の解説もある

図３　ブラックボックスの中を見えない状態でさわるコーナー

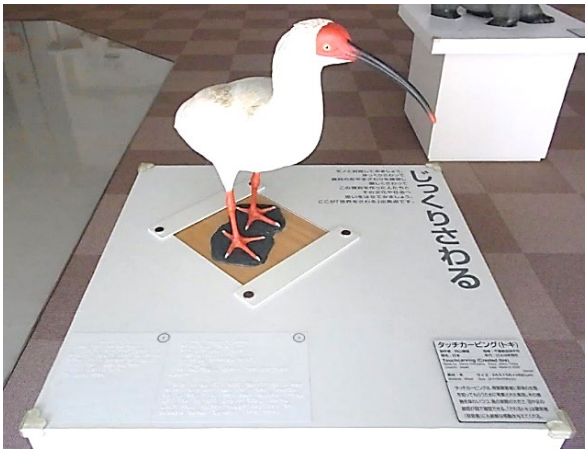

図４　彫刻をじっくりさわることができる

写真撮影：著者　2020年

2021年９月～ 11月、特別展示館において「ユニバーサル・ミュージアム ―さわる！“触”の大博覧会―」を開催。前例のない大規模なさわる展示となり、多くの出展作品すべてにふれることができるという展示方針は、メディアでも多く取り上げられるなど注目を集め、コロナ禍では異例の来場者数を記録する。さわることが意識された絵画や彫刻、インスタレーション、レリーフ、絵本、盲学校生徒の作品など、多岐にわたるジャンルの多様な素材の作品が、７つのブースに分かれて展示され、筆者もインスタレーション作品を出展し、作家として参加した。新型コロナウィルス感染症蔓延による影響は大きく、当初の予定よりも１年開催延期となったうえに、予定されていたワークショップや鑑賞ツアーなどの関連イベントは感染症対策のため中止を余儀なくされた。また、展示方法においても、照明を落として薄暗い中でさわる鑑賞を楽しむという企画が一部を除き変更されたり、次のブースに入ることが体感できるようにと考えられたゲートのデザインも、吊るされる予定だったストリングカーテンが撤廃されたりなど、安全面や衛生面への配慮が優先される事例もあった。感染症対策としては、来場者に対する入り口での検温・手指消毒と、ブースごとの手指消毒が実施され、素手で鑑賞することへのこだわりから手袋着用はなかった。

図５　会場入口風景

図６　わたる「てざわりの旅」2021

写真撮影：著者等　2021年

② 京都国立近代美術館（京都府京都市）

H29年度より、文化庁の助成を受け「感覚をひらく―新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業」に取り組み、多くの企画を積極的に実施している。例えば、さわることのできない建築模型が多い中、「さわる模型」を制作して美術館の建物に親しむ企画や、美術館のパンフレットを点字と拡大文字で作成したり、所蔵作品を触図と文章で紹介するツールを開発したりと、地域の盲学校や大学、行政と連携して、「みる」ことを中心としてきた美術館での体験を問い直し、障害の有無を超えて、誰もが美術館を訪れ、体験できるようなプログラムの創造・構築を目指している。

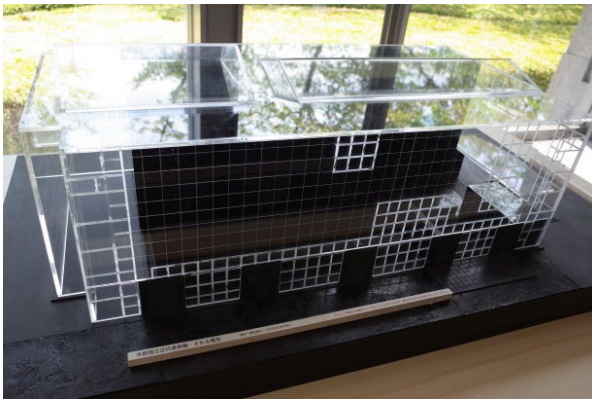

図７　さわる建築模型

図８　美術館紹介パンフレット（点字・拡大）等

図９　活動報告パネル（館内展示）

図 10　触図と文章で紹介する所蔵作品紹介ツール

写真撮影：著者　2018、2022年

また、単なる「健常者」から「障害者」への一方的支援にとどまらず、障害当事者と共にユニバーサルな鑑賞のあり方を模索する取り組みとして、作家（Artist）、視覚障害のある方（Blind）、学芸員（Curator）がそれぞれの専門性や感性を生かし、さまざまな感覚をつかう鑑賞方法を創造する「ABC プロジェクト」を実践し、晴眼者と視覚障害者がグループとなって参加する鑑賞プログラムの企画やワークショップで作品の新たな魅力を発見するとともに、美術館がさまざまな人びとの相互理解の場として機能する新たな可能性についても提案している。

図 11　イベント会場入り口

図12　グループに分かれ、学芸員の説明を聞きながら触察鑑賞

図13　ブロンズ作品には布手袋をして鑑賞

写真撮影：著者　2018年

③ 兵庫県立美術館（兵庫県神戸市）

1989年よりほぼ年一回のペースで兵庫県立美術館の常設展示室にて開催されてきたシリーズ展「美術の中のかたち―手で見る造形」は、長期にわたる企画展実施事例である（阪神・淡路大震災と新型コロナウィルス蔓延で各１回ずつ開催されなかった年がある）。目の見えない人、見えにくい人にも美術鑑賞の機会を広げる目的で、国内ではいち早く取り組みが始まり、回を重ねる中で様々なアプローチを通じ視覚優位の美術鑑賞のあり方そのものを問う機会となってきた。

近年は作家を紹介するスタイルが続いていたが、2022年は所蔵品であるブールデルを中心としたブロンズ作品を触る展示内容で、取り組み始めの初心に立ち返るような企画となる。車椅子の方にもさわりやすいよう台座が通常よりも低く小さく設置されており、点字による解説もある。

感染症対策としては、来場者に対し、施設入り口での検温に加え、会場入り口での手指消毒が行われていた。2021年の展示では、ニトリルゴム製の手袋着用が実施されたが、作品への影響があり、2022年は素手にアルコール消毒の後、ペーパータオルで水分をふき取る対応となった。感染症対策以外に、さわり方のガイドに対応するスタッフが配備されており、さわる前に指輪や時計を取ることや荷物を預かるといった、さわるマナーの案内が丁寧に行われている。

図14　展示ブロックによる誘導のある会場

図15　作品と一緒に座り触察鑑賞できる

図16　楮の質感のタブロー作品

図17　台座が小さく低めに展示されたブロンズ作品

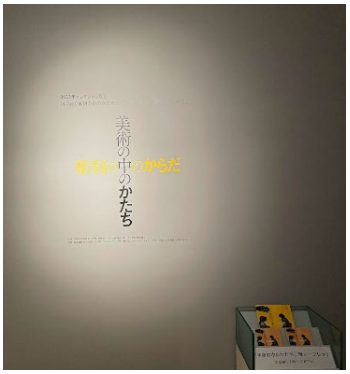

図18　2022年度会場入り口

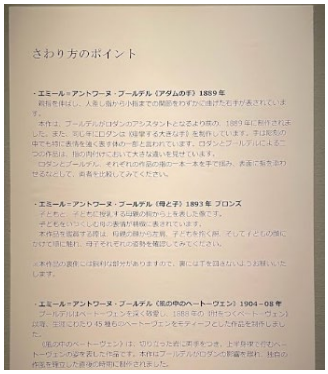

図19　さわり方のポイントが会場内に掲示されている

図20　低めの台座に点字の解説文が置かれている

写真撮影：著者　2018、2019、2022年

④ 長野県立美術館（長野県長野市）

2021年の本館新築に伴い整えられた美術館の基本方針に、美術館がだれでも安心してアートと出会える場所になることを目指すインクルーシブ・プロジェクトが位置づけられる。初めて訪れる方へ美術館体験のきっかけをつくる『場をひらくプログラム』、視覚による作品鑑賞を中心としてきた美術館での体験を問い直す『感覚をひらくプログラム』があり、サポートする・される関係ではなく、多様な立場の人が出会い、いろいろな感覚をつかいながら作品と出会うことで鑑賞のあり方を考え、作品の新たな魅力を発見するとともに、美術館が垣根のないコミュニケーションの場として機能する新たな可能性を模索している。中でも特徴的なのは視覚以外の感覚も使った鑑賞が可能なスペース「アートラボ」の常設化で、公共施設のアクセシビリティ対応の進化を感じる事例である。

コロナの影響でアートラボへの立ち入りが一時的にできなくなる事態もあったが、2022年８月現在、予約制で開室されている。

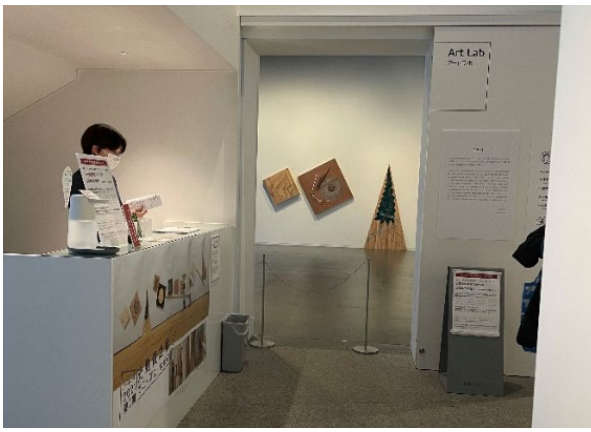

図21 「アートラボ」入口

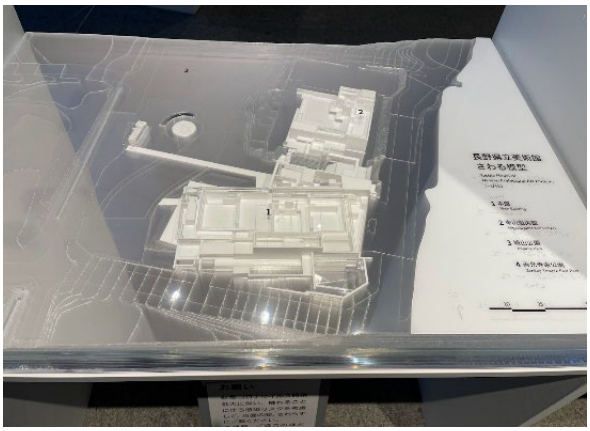

図22　美術館建物や周辺の様子が示された「さわる模型」がある

写真撮影：著者　2022年

⑤ ヴァンジ彫刻庭園美術館（静岡県駿東郡）

現代イタリア彫刻を代表する作家のひとりであるジュリアーノ・ヴァンジの個人美術館では、屋外展示作品の多くをさわって鑑賞でき、屋内の展示作品も一部さわって鑑賞できる展示企画が行われている。また、視覚障害者支援ツール「ナビレンズ（Navilens）」の導入により、屋内外の作品の情報や施設内を安全にナビゲートするための情報を音声読み上げによって伝えている。さわることのできる庭園や館内の模型もあり、ユニバーサルなミュージアムの在り方への意識が高い。

図23　さわることのできる作品が並ぶコーナー

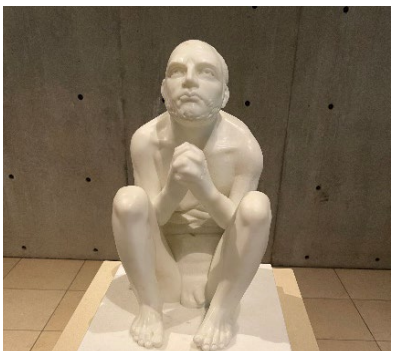

図24　ヴァンジの大理石作品「さわることができます」のマークが目印

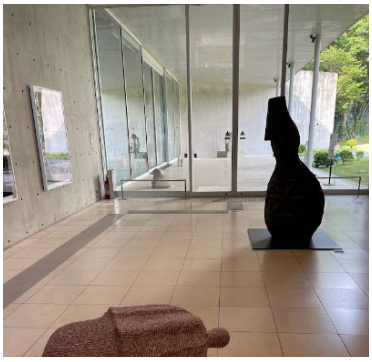

図25　石やブロンズ、石膏などの作品をさわることができる

図26　「ナビレンズ」の説明パネル

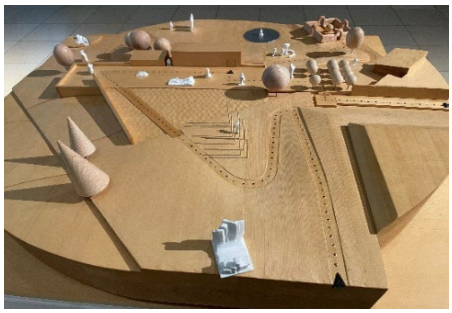

図27　さわることのできる地図（庭園）

図28　さわることのできる地図（建物）

写真撮影：著者　2022年

⑥ 山梨県立美術館（山梨県甲府市）

1986年に触図と点字による絵画の解説「手でみるミレー」を開発し、現在も常設しているが、コロナの影響で2022年８月現在、一般の触察体験は休止している。2015年、2017年、2018年と山梨大学、山梨県立大学と共催で「手でみる展覧会」を開催。2018年より所蔵品であるミレーの「種をまく人」のレリーフ教材開発が本研究で始まり、イタリアでの制作と検証を経て2021年に公開イベントを開催。

図29　2015年 手でみる彫刻展　本館ギャラリー・エコー

図30　2017年 手でみる展覧会　本館ギャラリー・エコー

図31　2018年手でみる展覧会　本館２階ロビー

図32　ミレーレリーフ公開イベントチラシ

図33　ミレーレリーフ公開イベントでの触察体験

写真撮影：著者　2015、2017、2018、2021年

⑦ 南山大学 人類学博物館（愛知県名古屋市）

「すべての人の好奇心のために」というスローガンのもと、博物館の資料展示には珍しい全面的なケージレスの露出展示となっており、神言修道会の神父によって収集された旧石器時代の石器や縄文時代の考古遺物、パプアニューギニアの民族誌資料、また大学の人類学・考古学研究資料、昭和時代の道具など、全ての展示物が触察可能である。資料の密度にも驚かされるが、点字での解説も充実し、概要に加え個別にも紙製の点字タグが付けられている。またイラストによるさわり方のマナーについての解説や、子どもが楽しみながら鑑賞・学習ができるようなワークシートの準備など、安全性に配慮しながらも来場者が主体的に鑑賞できる工夫が見受けられる。

大規模な博物館ではないが、さわりながらじっくり鑑賞するには十分すぎる情報量であり、気配りや手数のかかる展示方法であっても手の行き届く小規模ならではの特徴的な展示となっている。さらに、隣接してレファレンスコーナーやガラス張りの収蔵庫があり、学問や研究に興味を持つきっかけの場という役割も果たしている。

図34　資料が並ぶ館内

図35　ヨーロッパの石器のコーナー

図36　すべての展示物に素手でふれることができる

図37　さわり方の解説や点字タグが添付されている

図38　隣接するレファレンスコーナー

写真撮影：著者　2022年

⑧ 神奈川県立近代美術館 鎌倉別館　（神奈川県鎌倉市）

2022年７月、所蔵作品をさわって鑑賞できる「これってさわれるのかな？－彫刻に触れる展覧会－」を開催。ブロンズや石、陶、木などの素材の違う彫刻が並び、具象の人体彫刻から抽象まで、彫刻の歴史やジャンルを理解するうえでも有効な作品が選ばれている。作品保護と感染症対策の観点からニトリルゴム製の手袋をつけて鑑賞するため、素材感の違いは思いの外伝わりにくいのが残念であったが、素手でさわることのできる作品もある。さわりながら鑑賞しやすくするための工夫として、台座の高さが低めに設定されている。コロナ後に企画された展示で、コロナを経験した人々に対しさわることの大切さを再確認してほしいという思いから、非接触が好まれる時世にあえて開催が決められた。

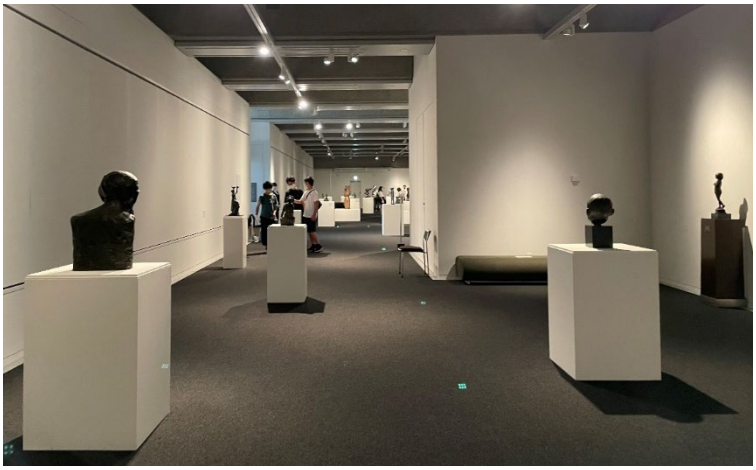

図39　展示室の様子　具象彫刻作品が並べられている。

図40　抽象彫刻のコーナー

図41　手触りの違いが比較できる石の作品

写真撮影：著者　2022年

⑨ アンテロス美術館東京分館（手と目でみる教材ライブラリー）（東京都新宿区）

イタリア・ボローニャにあるアンテロス美術館が制作した「手でみる絵画」が数点展示されており、事前予約をして触察することができる。「モナリザ」や「最後の晩餐」などの有名絵画のレリーフのほか、葛飾北斎「神奈川沖浪裏」や喜多川歌麿「姿見七人化粧」など日本画の手でみる絵画もあり、この教材を深く理解するための立体模型や補助教材が充実する。設立者の大内進氏は、この教材の有効性や扱い方を紹介するとともに、国内外の視覚障害教育の調査研究や教材の共同開発を重ね、長きにわたる盲学校での教員経験に基づいて収集された立体模型などの教材や関連資料の公開にも力を入れている。また、触覚教育に関連する研究会が開催されるなど、研究の発展を支える場にもなっている。

図42　翻案されたヨーロッパの名画が並ぶ施設内の様子

図43　アンテロス美術館と共同開発した日本画のレリーフ教材も展示されている

写真提供：大内進氏　2022年

⑩ 六甲山の上美術館さわるみゅーじあむ（兵庫県神戸市）

高価な貴石に彫刻されたカメオなどを中心に、金属や木、石膏を素材にした彫刻など、すべての作品にふれながら鑑賞することができる。小規模ではあるが、暗室での触察体験ができるなど、触察に特化した私設美術館である。

図44　館内の様子

図45　繊細なレリーフのカメオ

図46　水晶の彫刻

写真撮影：著者　2019年

⑪ 日本点字図書館付属池田輝子記念「ふれる博物館」（東京都新宿区）

2017年に開館して以来、視覚障害教育に特化した展示企画が年に２回ほどのペースで実施されている。これまでには宇宙やパラリンピックといったテーマのもとに、模型や触って確かめることのできる実物などの展示があり、2022年５月からは第10回目の企画展「手でみる彫刻展」が開催される。予約制で、古典彫刻の模型やレプリカ、全盲の木彫作家の作品、さわる絵本などが解説付きで楽しめる。

⑫ その他

以上10の国内美術館・博物館を今回の調査対象としたが、この他にも触覚を使ったユニークな美術鑑賞に関する取り組みを行っている施設はいくつもある。

例えば、**ギャラリー TOM** は国内の触察鑑賞において先駆的な役割を担ってきたことで広く知られており、**大塚国際美術館**の陶板による絵画の複製技術はさわる絵画の実現に親和性が高いことが知られている。**東京国立博物館**では2011年に手でさわって感じる本館の案内図「触知図」が設置され、「手でみるトーハク」と題した漆塗りの工程をさわって感じることのできる教材なども常設されている。**東京都庭園美術館**では2014年より、さわったり動かしたりしながら会話を楽しむ建築鑑賞のためのテーブル「さわる小さな庭園美術館」が常設されている。**茅ヶ崎市美術館**では2019年、インクルーシブデザインの手法を活用・展開した、視覚・聴覚・触覚・嗅覚などあらゆる感覚を用いて鑑賞する展覧会が開催され、2022年の来場者参加型の「トラベリング・ミュージアム」というプログラムでは、美術館での体験を触覚を使って残す取り組みが実施されている。**九州国立博物館**では、2020年より毎年、実物展示に加え、さわったり持ち上げたりできるレプリカや再現文化財を有効活用した企画展示が開催されている。**板橋区立美術館**における2020年のボローニャ国際絵本原画展では、特別展示「視るを超えて」と題して、イタリアにおける視覚障害者に向けた絵本や美術鑑賞の取り組みの紹介があり、５つの絵本原画の触察図を木製パネルで制作・展示して、平面絵画をさわって理解できる工夫が凝らされた。**三重県立美術館**では2021年に障害のある人向けの教材やプログラムにヒントを得ながら、多感覚鑑賞をキーワードにした展覧会が開催された。

また、**府中市美術館**のように企画展の関連イベントとして作品に触れながら鑑賞するツアーを実施するケースや、**東京都現代美術館**のように、ふれることが前提の作品を展示する美術館もある。その他、**NTT インターコミュニケーション・センター（ICC）**のキッズ・プログラムのように、ハプティックをキーワードにした子ども向けの体験型の展示やイベントも各地で実施され、またハンズ・オン・コーナーを設けた施設も多くある。

さらに、様々な美術館で視覚障害者と一緒に行う対話型鑑賞の実施も散見されるようになっている。

図47　茅ヶ崎市美術館　特別プログラム齋藤名穂「トラベリング・ミュージアム」のための、美術館での体験をさわりながら思い起こすテーブル

写真撮影：著者　2022年

図48　府中市美術館　青木野枝展「さわって、感じる彫刻ツアー」

写真撮影：著者　2020年

おわりに

ここまでで挙げた例のように、手でふれながら鑑賞するなどの触覚に着目した美術鑑賞の方法は、日本においても全国で広がりつつあると言え、それぞれにキャプションやディスプレイの工夫など、ユニバーサル対応を実施していることがわかった。また、国内の触覚教育に関連する研究会へ参加する中でも、ビジュアルにだけ頼るのではない美術のあり方や美術鑑賞の考え方に注目し、それぞれの活動場所で実施する人材が増えていることを感じる。コロナの影響で、増加傾向だった企画も実施がままならない状況となり、一時的に停滞したことは確かであるが、コロナ禍２年目、３年目には、対応策を携えて活動が再開されていると言える。これは、長い自粛期間や非接触が推奨される社会生活の中で、人々がさわることの大切さを改めて認識する機会となり、その重要性を発信する活動の意義が明らかになったことを示すのかもしれない。

また、今回は取り上げなかったが、展覧会開催などの他に、シンポジウムや講演会などの企画も重要な教育普及活動であり、全国各地で様々な取り組みがある。コロナ禍で普及したもののひとつに、オンラインによる人々の集いが挙げられるが、視覚障害教育のイベントや各団体の勉強会もオンラインで開催されるものが増え、参加しやすい環境整備が進んだとも言える。対面でのコミュニケーションに劣る点は多くあるが、対面が叶わない状況での関わり方として有効であり、海外などの遠方と手軽につながることができるのもメリットである。対面での対話や直接作品に触れる機会と合わせて有効に活用することで、より深い美術鑑賞のあり方や教育普及の浸透につながるのではないかと期待される。

付記

本研究は、JSPS 科研費 JP18Ｋ00232「地域連携による触覚鑑賞ツールについての調査・開発研究」（代表：武末裕子）における研究の一部である。

主な参考文献・URL

・広瀬浩二郎（2022）『世界はさわらないとわからない』平凡社
・国立民族学博物館編集（2021）『ユニバーサル・ミュージアム―さわる！“触”の大博覧会―』小さ子社
・茂木一司編集『視覚障害のためのインクルーシブアート学習：基礎理論と教材開発』（ジアース教育新社）の出版
・内閣府 HP　https://www8.cao.go.jp/shougai/un/kenri_jouyaku.html　2022.9/1最終閲覧
・国立民族学博物館　HP　https://www.minpaku.ac.jp　2022.9/1最終閲覧
・京都国立近代美術館 HP　https://www.momak.go.jp　2022.9/1最終閲覧
・兵庫県立美術館 HP　https://www.artm.pref.hyogo.jp　2022.9/8最終閲覧
・長野県立美術館 HP　https://nagano.art.museum　2022.9/1最終閲覧
・ヴァンジ彫刻庭園美術館 HP　https://www.clematis-no-oka.co.jp/vangi-museum/　2022.9/1最終閲覧
・山梨県立美術館 HP　https://www.art-museum.pref.yamanashi.jp　2022.9/1最終閲覧
・神奈川県立近代美術館 HP　http://www.moma.pref.kanagawa.jp/　2022.9/1最終閲覧
・南山大学 人類学博物館 HP　https://rci.nanzan-u.ac.jp/museum/　2022.9/9最終閲覧
・茅ケ崎市美術館 HP　https://www.chigasaki-museum.jp/　2022.9/8最終閲覧

・六甲山の上美術館 HP https://www.rokkoartmuseum.com/　2022.8/15最終閲覧
・ギャラリーＴＯＭ HP　https://www.gallerytom.co.jp　2022.9/1最終閲覧
・三重県立美術館 HP https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum　2022.9/8最終閲覧
・東京国立博物館 HP　https://www.tnm.jp/　2022.9/8最終閲覧
・東京都庭園美術館 HP　https://www.teien-art-museum.ne.jp/　2022.9/8最終閲覧
・UNI DESIGN HP　https://u-ni-design.com/　2022.9/8最終閲覧
・ICC　HP　https://www.ntticc.or.jp/ja/　2022.9/10最終閲覧
・九州国立博物館 HP　https://www.kyuhaku.jp/　2022.9/10最終閲覧
・府中美術館 HP　https://www.city.fuchu.tokyo.jp/art/　2022.9/10最終閲覧
・板橋区立美術館 HP　https://www.city.itabashi.tokyo.jp/artmuseum/index.html　2022.9/10最終閲覧

A research about art appreciation using tactile sense on Japanese museums

Shoko Furuya [＊1]

Abstract

In the conventional way of appreciating works of art, the general form of exhibition relies solely on the sense of sight.

Recently, however, efforts to utilize senses other than sight have begun to apear in Japan as well.

This paper collects and introduces practical examples of museums in Japan regarding the efforts to utilize tactile sensations.

In addition, I will consider the possibility of art appreciation methods that utilize tactile sensations and clarify its effects and significance.

Keywords：

Tactile education, art appreciation, sculpture

(Affiliation)

＊1 Faculty of Human and Social Services, Yamanashi Prefectural University